

FateGrandOrder～歩みを止めること無かれ～

転輪聖王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生とは明日を見つめるものであり
諦めなど必要ない。

どうか歩みを止めないで欲しい。

明日はきつと可能性に満ち溢れているのだから。

目次

坂の上まで行けたなら	1
彼岸花が咲く前に	6
明日はきつと巴へと	11
この手が空に届くまで	18

坂の上まで行けたなら

side???

ああこれでよかったのよ……………

これで大獄丸も倒せたし……………

たとえどれだけ愛し愛されても限界が来ることは目に見えていた……………

だからいいのよちょうどいい機会だったのよ……………

でもやっぱりちよつときついなあ

「諦めるのか？」

「えっ？」

聞き覚えのない声にふと声が漏れる

そして声の方に目をやるとそこには端整な顔立ちの青年が立っていた。

「だから、諦めるのかと聞いている。」

青年の言いたい事は容易に想像できた。

「いいのよ……………これで……………全て丸く収まるのよ……………」

そうこれでよかったのよ……………

「そうか……………ならば何故涙を流している。」

ふと頬に触れると私の頬は濡れ熱い何かが流れていた。

よかったのに、これで良かったはずなのに……………

覚悟は出来ていたはずなのに……………

涙など等の昔に捨てたはずなのに……………

「本当は今すぐににでも彼のもとに駆け出したいのではないのか？」

青年の言葉が私を責め立てる。

「無理よ……………私の身体はもう死に体。それに彼に会わせるかおがないのよ……………」

どんな顔して話せばいいのか、普段どんなふうに話していたかさえもうわからないのよ……」

「だから諦めるのか？」

「もう手遅れなのよ……。」

「そうか、ならば逝け。明日を夢み求めぬ者に生を謳歌する資格など無いし、必要なかろう。」

青年は腰の刀を抜く。

「最後に、お主はこの結果に満足しているのか？」

青年は今更そんなわかりきったことを聞いてくるので

「私だってこんな結末望んでなんかないに決まってるでしょ!!？」

と私はつい声を荒らげる

「私だって普通の女の子みたいに恋してずっと彼と添い遂げたかった。」

涙が止めどなく溢れ出す。

「全く、最初からそう言えばいいものを気難しい女だ。回道九十一

麗花回凜

それで体も動くだろう。」

「行け、もう振り返る必要もなかろう。求めたものはその先に必ずある。」

「ありがとう…… 見てくれるかな？私の事。」

体の調子が戻ろうとそれでも不安なものは不安なのだ。

「勿論だとも、貴殿の勇姿しかと見届けよう。さあ行け。」

「うん！」

私は駆け出した。振り返る事もない、きっと彼は見てってくれるから私の全力を

マジ上げる!!？

side主人公

「ふう。行ったか？」

「それにしても見てていてか…… 見ているとも何事にも目を逸らさないその眼差しそしてその全てを背負いそれでも折れないその背

中…… 励めよ乙女。」

「きつと君なら成功するから頑張つて鈴鹿御前。」

そして僕はその場から立ち去った。誰かが見ていることに気付かずに……。

side 鈴鹿御前

やつぱり名前聞き忘れたから戻つて来たらすごい事聞いちゃったんだけど

あいつどんだけイケメンなのよ地味になんか名前知られてるし。

やば顔が暑くなって来た。私どんだけ軽い女なのあの程度で別の男に気が行くとか。

でもいいやこれが私だもの、いつかまた…… 会えるよね！

side 主人公

僕は、前王ビンドウサーラの息子であった。

ビンドウサーラの剃毛師（ナーピニー Napini）をしていたダンマーという母がチャンパーのバラモンの娘であったことが発覚したため正妃とされ、ビンドウサーラとその母の間に僕とヴィータシヨールカという息子が生まれた。

僕は父ビンドウサーラと不和であり、タキシラで反乱が発生した際ビンドウサーラは軍も武器も与えずに反乱鎮圧に向かうよう僕に命じた。

この状況を心配した家臣の一人が

「王子よ、軍も武器もなしに我々は何を用いて誰と戦うのでありましょうか？」

と問うから僕は

「もしも私が王者に相応しいほどの善根を持つならば軍と武器が現れるであろう」と答えた。

すると神々は大地を割つてその裂け目から軍と武器を出し、僕に与えた。

これを聞いたタクシラの住民達は道を清めて僕を大歓迎し

「我々はビンドウサーラ陛下にもアシヨールカ王子にも叛いているので

はありません。ただ悪しき大臣が我々に害を与えたためにこれを討ったのみです。」

と言い僕は同地の人々の尊敬を得て支配権を得た。

この時僕は初めて市民に認められ涙を知った。

僕は治世10年頃から釈迦縁の地を回り、「法の政治」を宣伝し、

またそれが実行されているのかどうかを確認してまわる「法の巡幸」を開始した。

治世11年にはブツダガヤの菩提樹を詣でた。

そして釈迦の入滅後立てられた8本の塔のうち7本から仏舍利を取り出して新たに建てた8万4千の塔に分納した。

これは本当に大変だった。

第三回仏典結集も行なった。また法の宣布を目的とした新たな役職として法大官（ダルマ・マハーマートラ、Dharma-mahā mātṛa）を設定し、仏教の教えを広めるためにヘレニズム諸国やスリランカに使節を派遣した。

その他、マイルストーンも設置した。

ダルマの内容として繰り返し伝えたのは不殺生（人間に限らない）と

正しい人間関係であり父母に従順であること、礼儀正しくあること、

バラモンやシャモンを尊敬し布施を怠らないこと、年長者を敬うこと

、奴隷や貧民を正しく扱うこと、常に他者の立場を配慮することなどを挙げた。

ただし、統治上の理由から边境の諸住民に対しては「ダルマ」の仏教色を前面に押し出さないうように配慮もした。ダルマが全ての宗教の教義と矛盾せず、1つの宗教の教義でもないことを勅令として表明したし、

バラモン教やジャイナ教、アージーヴィカ教は仏教と対等の位置づけを与えた。

僕は晩年、地位を追われ幽閉された、

「原因は宗教政策重視のために財政が悪化し、
軍事の軽視のために外敵の侵入に対応できなくなったからである。
後悔はあった。」

「だが、逆にあれでよかつたとも思える。」

「残せた物もたくさんある。」

「彼らが明日を向いて歩くことを忘れないでいてくれればいい。」

「物語は自分たちで書くものだから、」

「決して生とは絶望の物語なんかじゃないから。」

「アシヨーカの日記より」

彼岸花が咲く前に

「いたぞー!」

「ついに見つかってしまいましたか。」

「取り囲め相手は化け物た何をしてくるかわからんぞ。」

「化け物ですか…… あなた方からすればそうかもしれませぬね。」

「もう駄目の様ですぬ。」

此処まで結構頑張ったんですがね……

もう少し生きていたかったのですがね……

それももう叶わぬ願いのようです。」

「何を言っているか知らんが、死ぬ。」

私は振り上げられる刀にぎゅつと目を瞑った。

死がここまで恐ろしいものだとは思いませんでしたよ。

涙が溢れるのがわかる。

だから一向に刀は来ない。

ふと目を開けるとそこには目麗しい青年が男の刀を受け止めていた。

「なっ!何者だ貴様!!?」

突然現れた青年にあたりは騒然とする。

「そうか、貴様もこの化け物の仲間か!」

「ち、違います。この様な方……」

私は青年に制され

「我は王にして、明日を夢見る者の味方である。彼女を斬り捨てようと言うものもは心して掛かってくるがよい。そこから一步先は王の御前、地獄であると心得よ。」

すると彼の威光に皆が怯む後

「怯むな!!?相手は2人王を語る不屈き者に罰を!」

先程から指揮を執っていたであろう男が叫ぶ。

「おおう！」

皆同調し雄叫びをあげ抜刀する。

もう無理だこの数に勝とうなど不可能だ、私が絶望しかけた時に「大丈夫だ君は明日の事を考えていればいいすぐに終わる。」

不思議と安心させられる声にこんな場所で心がやすらぐ

彼の背中は大きく必ず戻ってくると物語っているように止めることもせず

私は

「はい！私の明日守ってくださいね。」

名も知らぬ青年に自身の未来を委ねてしまったのである。だが悪い気はしなかった。

そこからは一瞬の出来事であった。

彼は抜刀し

「万象一切灰燼と為せ残火の太刀。」

と唱えると彼の刀が先からどんどん焼け焦げたようになって行く。

「何をするか知らんが無駄だここら一体にいるのは我々だけではない。

ざっと20万人はいる。大人しく死ね。」

私は20万にという数に驚くだが、彼の背後いるだけで何の恐怖も絶望も湧いて来ないそこにあるのはただの安心だけだった。

「ならば、貴様らに真の王の力というものを見せてやろう。」

「残火の太刀 東 旭日刃」

すると彼の刀から膨大な熱量の炎が溢れ出し指揮していた男を残し全てを消し飛ばしてしまったのである。

圧倒的それしか頭に浮かんで来なかった。

そして彼は最後の命を消し飛ばそうと歩みだした。

「まっ待て、お、お前はあいつがなんなのかわかっているのか？」

「狐の化け物だぞなぜ庇う！」

男は怒りを露わにした。

「だから私は言ったであろう、明日を夢見る者の味方であると。」

「そして一步先は地獄であると。」

「黙って逃げ。」

そして最後の命がいま消し飛ばされた。

「大丈夫だったかい？」

私は再び声を掛けられた。

「大丈夫ではありませんが…… 貴方何者でいらっしやいますの？」

私は聞かすにはいられなかった。

「ちよつと昔の大陸の小国で王様をやっていただけさ。」

「それじゃあ、また何処かで。」

「あつ！待ってください!!？」

私は咄嗟に彼の手を掴んだ。

「また逢えますよね？」

「きつと、君が明日から目を背けなければきつとまた会えるよ。」

と言って彼はスウ〜と消えていった。

まるで夢のようだった。

「全く、胡蝶の夢も馬鹿に出来ませんね、うふふ。」

さて明日向かって歩き出しましょうか。

彼に会って伝えたい事もありますし、簡単には私折れませんから。

と決意を新たに私はその場を去った。

sideアショーカー

「それでいい、この結んだ縁きつと意味を持つときがくるから。」

「頑張るんだよ、玉藻の前。」

「人に言えたことではないか……。」

と言って彼はまた何処かを目指すのであった。

インド中央南西のウツジヤイン地方の反乱鎮圧の際には彼は自身

も負傷してしまい、このときに手当てをしてくれた商人の娘デーヴィーと結婚する。

ビンドウサーラ王は不予に伏すと第一王子スシーマを後継者に儲けることを決める。

これを知った彼は王都パータリプトラに進軍、王太子スシーマを討ち取った。

その他の対立した異母兄弟達も殺すことで王座を獲得(篡奪)した。また混乱によって即位の儀を催すことができなかつたこと等を理由に

彼を軽視するようになった官吏達を処刑してしまう。

王となった彼は暴君として古代インドに君臨を果たした。

圧倒的な武力で領土を拡大、古代インドで最大の統一国家を築くと同時に、

彼の軍が通った土地は劫火に焼かれ草木一本も残らないと恐れられるまでに至った。

彼の霸王としてのあり方に終焉をもたらしたのはインド東岸部のカリンガ王国との戦争である。

カリンガ王国は彼の祖父チャンドラグプタ王の時代から何度もマウリヤ帝国の侵攻を阻んできた大国であり、

インド亜大陸を統一するにあたっての最大の障壁とみなされていた。

王治世9年頃、彼はマウリヤ帝国軍40万の大軍を率いてカリンガへの南下を決行する。

これに対してカリンガ王国軍は歩兵6万人、戦車1000?両、戦象700騎という戦力で果敢に応戦した。

大国同士の全面戦争は凄惨を極め、

カリンガ王国軍は戦士のみならずバラモンや民間人を含めて15万人以上が死亡、

マウリヤ帝国軍も10万人以上の戦死者を出した。

主戦場となったダヤー川流域は血と炎で赤く染まっていた。

この戦いは、数々の戦場や闘争を踏破してきた彼にすら深い後悔と

自責の念を刻むことになった。

「勇気」とはいったい何であろうか？

「勇気」とは「怖さ」を知ること「恐怖」を我が物とすることであり人間讃歌は「勇気」の讃歌、人間のすばらしさは勇気のすばらしさである

いくら強くても私は「勇気」を知らぬノミと同類であった。

くアシヨーカの日記く

「僕は勇気を知れたのだろうか……。」
それに応えるものはいない。

明日はきつと巴へと

side 巴御前

「巴よ時に、お主は我が家臣か？はたまた愛人であるか？」

私には質問の意図が分からなかった。

「何故ですか？」

「良いから、申してみよ。」

「私はあなたの臣であります。」

「そうか、ならばお主に任を与える。心して聞き、何としてでも遂行して見せよ。」

「はっ!!？」

私はこの時あの様な事を言われるとは予想だにしなかった。

「東国へ行き我等の勇姿を語り継げ。」

私は一瞬何を言われたのかわからなかった。

「義仲様、な、何を仰っているのですか！」

「私は果つる時まで御身の側につ！」

「どうやら聞こえていなかったようだな。」

「この戦において女子は邪魔だ。疾く去れ、巴。」

「義仲さ」「三度目は無いぞ!!？」っ。

「巴よ、我々の勇姿いと雄弁に語り広めるがよい。」ニツ

これが私の見る義仲最後の笑顔であった。

全くこの巴が貴方様の無理を見逃すとお思いなのでしょう。

「任しかと承りました。必ずや遂行して見せましょう。」

「最後の戦にしてみせ奉らん。」

と言い、大力と評判の敵将・御田八郎師重に馬を押し並べて引き落とし、首を切った。

その後私は涙を飲んで鎧・甲を脱ぎ捨てて東国の方向かい馬を走らせた。

side 義仲

「行つたか……。」

「良かったのですか？」

「最後まで勇ましくなどと言うくだらん呪縛に囚われるのは男だけで十分だ。」

「本当に義仲様らしいお言葉です。」

「我々もそろそろ真剣に腹をくくらねばならぬようすな。」

「最後まですまぬな。」

「今更ですよ。それに我々は御身が御身であられるからこそここにいるのですから。」

「ふっ、そうか。」

「おい、義久は生きておるか？」

「御身の側に。」

「これを巴のに頼む。」

私は義久に文を託した。

「御心のままに。」

「義久はすぐさま巴が去つた方へ駆けて行つた。」

「思えば佐々木義久という男は不思議な男であつた。」

「このご時世苗字を与えられた身でありながら我に仕官すると言ひ出して来た。」

「それも我々が負け戦をしようとしていた頃である。普通なら疑う。」

「正しく私も疑つた目的は何だと密偵ではないのかと。」

「しかし違つたあいつの目に敗北や死といった概念は写つていなかった。」

「ただ明日を愚直なまでに見つめるだけの男だつた。」

「そして我々はいつの間にかあいつのことを信頼していた。」

「彼がいれば勝てるのではないかという錯覚に陥るほどに。」

「そこまでに彼を信頼させられていた。」

「最後の心残りは案外あいつと明日を見つめられないことかもしれないかもしれんな……。」

「ふっ」

「自然と笑みがこぼれる。」

「どうかいたしましたか？義仲様。」

「いや、あの男はいや義久は不思議な男であつたなと思つてな。」

「義久ですか……ええ、まったく計り知れぬ男でした。」

「与太話もこれで終わりだ。」

「行くぞ、これが私からの最後の命だ。」

「我々の最後の戦、決して明日から目をそらすなよ。」

「はっ」

残り少ない家臣が声を上げる。

「行くぞ！」

「おおー！」

義久よ巴を頼んだぞ……

さらばだ巴。

side巴

私は東国に向け馬を走らせていた。

すると私は大きな崖を見つけた。

私は馬を止めそこに立ち寄った。

ここらか飛び降りれば義仲様に会える気がしてしまったのである。

あと一步踏み出せばというところで声を掛けられる。

そこにいたのはつい最近仕官して来た、義久であった。

私は何度か彼に助けられた記憶がある。

挫けそうな気持ちを奮い立たせてくれたのはいつも彼だった気がする。

いつも彼が何処を見ているのか私は一度問うたこともあった。

(義久、あなたはいつもどこを見ているのですか?)

(巴様ですか……そうです、端的に言えば、明日をですかね)ニコツ
あの時はこいつは何を言っているんだと思つたが今ならわかる気がした。

しかし今私の目の前にいる彼はいつもと違った。

「何をしていらっしやるのですか？巴様。」

「うっ！き、貴様には関係ない。」

私は彼の冷め切った声に一瞬たじろぐ。

「はあゝ」

彼は一度ため息をつき、続けた。

「義仲様、貴方は極めて見る目が無かったようです。」

私はその言葉に明らかな怒りを示す。

「何が言いたい。」

「本当にわかっていらっしやらないんですか？」

「なに？」

「はあゝ」

と彼は再びついた。そして

「貴様などさつさと果ててしまえ。」

ゴミを見るような目で告げられた。

「つつ!!？」

私はそれに対して声を出せなかった。

本当は分かっていた。

何が彼をそうさせているのかを。

しかし私は諦めてしまったのだもうすでに。

私はその場に膝と手を付いてしまう。

私は思考が全くまとまらなかった。

「どうした。ここで果てるつもりでは無かったのか？」

「死にたかったのだろうか？・疾く往ね。」

私は彼の言葉から逃げるように刀を抜いた。

「貴様に、貴様などに私の何がわかると云うのだ!!？」

私は気の赴くままに刀を振るう

しかしそれは義久によつて容易く受け止められる。

「わかりたくもないよ。明日から目を背けた者の心理など！」

「なにをっ！」

私はまた刀を振るう。

しかしまたも容易くいなされてしまう。

「何が違う？君はただ彼の前でいいかっこをしたかっただけだ。」

「だから君は彼のまえでは自分は臣であると言った。」

「だか、始めから彼と死別する覚悟など持っていなかった。」

「黙れ、黙れ、黙れ。だまれーっ！」

私はただただ刀を振るった何かを払うように。

何も考えないように。

「ハハッ！まるで子供だな。」

「さぞ気分がいいだろうな。」

「何も考えず、いや考えないように、自分の見たいものだけを見るのは。」

この問答はしばらく続いた。

私はただ彼の言葉を聞かないように刀を何度も何度も振るい続けた。

「はあっ、はあ、はあ。」

「あれ？もう逃避は終わりかい？」

「だ…まれ。」

「まあ仕方ない。彼に託されたしね。」

「？」

私が首を傾げていると彼は一歩ずつ確実に私に近づいて来た。

しかし今の私にはもう刀を振るう力など残っていないかった。

そして彼は私の前で立ち止まり手を振り上げた。

私は死を覚悟した。

しかしその手は私の頭をそつと優しく撫でた。

「辛かっただろう、苦しかっただろう、挫折そうになっただろう。」

「よく頑張った。時には涙を流すのも必要だ。」

「貴様などにつー！」

私は頬に涙がつたう確かな感触があった。

きっとこの人にはバレていたのだろう私が決して涙を流すまいと
していたことを。

「私はこれからどうしたら良いのだろうか？」

私は完全に戦意を喪失していた。すると

「これは、彼が君にと僕に託されたものだ。」
彼の手には文が握られていた。
私はそれをそつと開ける。

く拝啓巴殿く

君がこれを読んでいるという事は

僕は君を逃がす事に成功したようだね。

すまないね、最後まで君の側にいてやれなくて

生憎僕にはこんな方法しか浮かばなかった申し訳ない。

我、源義仲よりここに家臣巴最後の任を書き記す。

現刻を持つて我らを古典とし

新たな幸福を追求する事を命ずる。

源義仲

これは僕のいわば我儘というやつだ聞かぬ好きにしてくれていい。

今までありがとう心から愛しているよ。

「本当に最後までずるいお人だ。」

「こんなこと書かれたら死なないじゃないですか。」

止めどなく涙が溢れる。

「これからどうします?」

答えはもう決まっている。

「もう少し頑張つて見ようかと思ひます。」

「それがいい。」

「それでは、義久貴方も達者で。」

「ええ、達者で。」

私はその言葉を聞くとまた馬で走り出した。

今ならわかる気がするよ義久いつかのあの問答の意味が。

そしてやはり君はやはり私の希望のようだよ。ふふつ

sideアショーカー

「さて私は追っ手の処理でもしますかね。」

「仕事だ、氷輪丸。」

かの王は言った

命とは終わるもの。

生命とは苦しみを積み上げる巡礼だ。

だが、それは、けっして死と断絶の物語ではない。

そしてもう1人の王はこう続けた。

愛と希望の物語であると。

この手が空に届くまで

「何か面白いことないかな。」

私は暇を持って余しぶらぶらと街の外れ山道を歩いていた。

「おっ！」

私は前から1人の剣士が歩いて来るのが見えた。

私だつて伊達に剣に生涯をかけているわけではない。

それなりに人を見る目はあるつもりだ。

彼の立ち姿、重心の位置全てが私に只者ではないと言っている。

私は好奇心の赴くままに少し男を試してやろうと思った。

私はすれ違いざまに刀を抜こうと手をかけた瞬間に、

「好奇心とは素晴らしいものだ」

「だが未知との遭遇に敬意を払えないのはいただけじゃないな」

と刀にかけている手にそつと手を重ね止められた。

いとも容易く私は思考を読まれたのだ。悔しかった。

それと同時にどんな奴なのかと顔を上げると。

そこには私の大好き物と言っても過言ではない美青年がいたのだ。

私は不意に

「結婚しましょう」

「すまない、どれほどの美人であろうと初対面の方と結婚する度量は持ち合わせていない」

「びっ、美人！」

私は顔が暑くなるのがわかった。

「まあでも友達からが妥当なところではないかい？」ニコツ

「どんだけ笑顔が眩しいのよ。」

「あつ、あれは言葉の綾というもので、」

「ふふふ、わかっているよ少し揶揄っただけだよ」

「でも、友達になつて欲しいのは本当だよ」

「なんだこの素敵な生き物は。」

「それならよろしく、私は新免武蔵守藤原玄信。長いから武蔵でいいよ」

「それじゃあ僕からも佐々木義久だよ。よろしく」ニコツ
この笑顔ズルすぎるでしょう

私はこの時密かにこの男を必ずや手に入れると決意した。

「へえ、源義仲の家臣と同じ名前なんだ」

「そ、そうみたいだね」

「平家物語を見たときは僕も驚いたよ」

「で、義久はこれから何処に行くの？」

「まずははらごしらえかなあ」

「そつかあ、それじゃうどん食べに行くかあ」

「ふふふ、そうだね」

「？」

私が頭にはてなを浮かべていると

「いえ、そういった無邪気な表情もできるのかと思ってね」

「も、もう早く行こ、置いて言っちゃわよ。」

私はまた顔が暑くなるのがわかる。

人と話してここまで楽しかったことがあつたらうか？

「それは、困ったなあ」

などと笑いながら私たちはうどん屋へむかった

「ふう、食べた、食べた」

「ふふつ、本当にうどんが好きなんだね」

「それはもう、大好きよ」

「そつか」

優しくそれでいて何処か儂げに微笑む彼

「それで義久は、これからどうするの？」

「さあ、わからない。ただ全国をぶらぶらするだけさ」

「ならさあ、私と一緒に旅しない？」

私は、そのどこか儂げで消えてしまいそうな彼を放っては置けない
と思つた

美少年だし……

「ふむ……」

彼は顎に手を当てまさか考えていますといった姿勢で唸った。
何をしても様になる

「かっこいい……」ボソツ

不意に言葉がこぼれ落ちた

「ふふっ、ありがとう」

「なっ！そういうのは聞こえてないふりしなさいよ！」

「で、どうするの一緒に行くの行かないの!!？」

私は顔の暑さを誤魔化すために捲し立てた。

「ごめん、ごめん」

「そうだね一緒に行こうかちようど一人にも飽きてきたところだ」

「よしっ」

私は心の中で小躍りしていた。

これで攻略する機会も増えるってもんよ。

見てなさいすぐにこの武蔵無しでは生きていけなくしてやるんだから。

と恋のいろは惚れた腫れたなどこれっぽっちも知らない恋愛下手な少女は一人心中で張り切っていた。

それから私達は様々なところを回った、江戸に行ったり紀伊の半島を歩いたり。彼という時間は何処か夢のようで永遠を感じられた。

彼と刀を交える時間は至福のひとときだった。全てを忘れただ刀を振り続けられたこの世界には彼と私しかいないように感じて彼が私だけを見ていてくれていたからそれが無性に嬉しくて、それこそ夢ならば覚めないでくれと願うほどに。

だかそんな時間は永遠には続かないのが世の常

知っていたがそんなこと知りたくなかった。

そしてその終止符を打つのが自身であるという事も。

「私には果たさなければならぬ業がある」

「…………… だから私達の旅はここまでね」

私は本当の気持ちを必死に押し殺し出来る限り最高の笑みを浮かべた。

引きつっていないだろうか、可愛くないと思われていないだろうか。

「そうか…」

彼の声色も普段と違い重い。

「それなら最後にお礼を言わないとね」

「いいよお礼なんて」

「本当は最初から気付いていたんだ…」

「えっ?」

「君はずっと僕を心配していたという事を」

「君の目がいつも雄弁に僕に語っていた」

「嬉しかったよ。ここまで心配されたのは初めてだ。」

「ありがとう」

彼はそう笑う

本当にどこまで私を惚れさせれば気がすむのだろうか

「困ったなあ〜そんなこと言われたら決意が揺らいじゃうじゃんか…」

目頭が熱くなるのがわかる泣かないと決めていたはずなのになあ

それでも私は絶対に折れない私は彼の前では最高の私であり続けると決めたから

「それでも決めた事だから」

「これが私の道だから」

もう迷いはない。私の決めた道を進む。

「ちよつと待って、武蔵ちゃん」

「ん?」

と思わず振り向くと

彼の脇差を投げ渡された。

「それは饞別だよ」

彼がいつも肌身離さず持っていたものだ。

「新免武蔵守藤原玄信」

「はっはい」

不意に本名を呼ばれ驚くわたし

「貴殿の心意気まさに天晴れだ。決して歩みを止めるなよ」

彼はいつになく強者であり王者の風格をまもっていた

「はいっ。我が刀にかけて誓いましょう」

と言ひ私はかけだした

彼女ならきつと大丈夫だ根拠なんていらなだつてあんなにも輝いているんだから。

彼なら大丈夫でしょうだつてあんなに力強い言葉をかけてくれる程煌めいているんだから。

だから「少しの間、さよならだね」

そして時は流れるそう止め処なく滞りなく

ザクッ

刀が男の胸を貫く

「誠に見事、蝶よ華よと思つておつたら誠猛々しい獅子であつたか……」

「違うわよ、覚悟を決めた女は強いのよ」

「小次郎これで私の勝ちね」

「ああ、私の敗北だ」

「ふっ、女子のことなど知り尽くしておると思つておつたがまだまだ修行不足ということか」

そんな男の言葉を尻目に私はその場を去った。

「最後はこれに助けられたわね」

と過去善久から餞別としてもらった脇差を眺める。

「でも、私もこれで最後かなあ〜」

近くの木の根元に座り込み空を眺める。
体の力が抜けていくのがわかる。

「最後まで会い会いたかったなあ〜」

こんな後悔をするなら気持ち伝えておけば良かった。

そっと目を閉じる

「誰に会いたかったんだい？」

懐かしい声にふと目を開けると、そこには私が惚れた笑顔があった。
た。

「わかってて聞くのはタチが悪いわよ」

私はじと目で睨む。

「そっかそっか確かに今のは少し意地悪だったかな」

ああ、これだこの彼とのたわいのない会話ただそれだけで心が暖くなる。

「楽しめたかい？」

「ええ、これほど無いってほどに」

「満足できたかい？」

「大満足よ」

「夢はかなったかい？」

「叶え過ぎたかも」

「でも、やり残したことがあるとすればそうねえ」

彼女は少し悩んだ風になると

「もう少し貴方と一緒にいたかった」

彼女は涙を流しながらも必死に笑顔で答えた。

「ずっと貴方だけを見ていた。ずっと好きだった。」

「善久、愛してる」

そう言い残して静かに彼女はこの世を去った。

「全く、武蔵はいつも急ぎ過ぎだ返事も聞かずに」

目頭が熱くなるのがわかる、確かに感じる頬を伝う涙

「涙なんてとうの昔に枯れたと思っていたんだがな」

「やはり人との別れは何度あろうと慣れられるものではないな」

「知っていた、でも知らぬふりをしていた本当にこんな僕を愛してくれてありがとう」

僕はそつと武蔵の額にキスを落とす。
だから

「安らかに眠っておくれ武蔵」

宮本武蔵の墓からは5本の刀が出土したそうだ。

未だ宮本武蔵の墓を誰が造ったのかは分かっていない。